

サンプル

もんできた

乾 莊次郎

祝言をあげてからまだ半年も経たず、いまは暮らしの  
いちいちがきらめく頃なのだから、ふたりしてゆっくり  
過ごしたいとおなみは思う。亭主の佐六が空になった茶  
碗をおなみに差し出し、それを受けとって杓文字しやくもじでごは  
んをよそう。それだけのことでおなみは満たされるのだ。

かなうことならずと佐六のそばにいたいのだが、大  
工の佐六は朝が早いし、近頃は休みの日でも出かけてい  
る。棟梁の忠兵衛に薦められて自分の家を普請している  
のだ。といつても自前で建てるのではない。大工町の寺町  
寄りに忠兵衛の知るべが持っている十坪ほどの土地があ

り、そこなら安く借りられる。狭い土地だが、二間に台所  
くらいの家はできるだろうし、ふたりで暮らすには十分  
だろう、と言うのだ。

佐六は大工なのだから家を建てるのはお手の物だし、  
忠兵衛の弟子や左官、畳刺しにまで手伝わせるというか  
ら、佐六には渡りに舟だ。忠兵衛がそこまで佐六に肩入れ  
してくれるのも、佐六の腕を見込んでのことだった。

忠兵衛には弟子が五人いて、ほんとうなら最古参の竹  
次が次の棟梁になるのだが、竹次は生来怠け者だし、いつ  
までたっても腕があがらない。それならば、と佐六を次の

棟梁にしようかと決めていたのだ。

祝言のことも忠兵衛は佐六の面倒をみた。おなみが佐六と祝言をあげることになったのも、忠兵衛が仲をとりもってくれたからだった。

おなみは古物町の裏長屋で棒手振りの子として育った。幼い頃から貧しさしか知らないが、決して愚痴を言わず、家計の足しにと飯炊き女や子守りをして働いてきた。

そんなおなみの評判を耳にした忠兵衛が出向いてきて、ええ縁談があるんじゃないかと声をかけたのだった。

佐六は無口だがよく働くのだと、まるで我が子のよう

な口の添えようで、

「ほんな人なら……」

おなみはもちろん両親も二つ返事で受け、ひと月後には祝言となったのである。

佐六は六尺近くもある大男で、お世辞にもやさ男とは言えないが、大柄な割に気が小さく、欲のない男だった。

おなみはそんな地味なところが気にいっていた。おなみも器量という面では文句も言えない。眼は細く、口は大きくて、美人とはほど遠い顔立ちで、男の顔に注文をつけられるものではないと、それはおなみも自覚していた。

祝言をあげてから、古物町の裏長屋に住んでいた佐六のもとへ転がりこんだが、所帯も持ったことだし、いつまでも長屋住まいというわけにもいくまい、ということでも忠兵衛が普請の嚙を持ちだしてきたのだった。

しかし仕事の合間に少しづつ建てるのだから、遅々と進まない。せっかく暇ができて材料がないこともあり、いったいいつでけるんじゃないかと近所からも不審がられているほどだった。

「家がでけたら、今度は子どもやな」

仕事帰りに忠兵衛に言われると、佐六は眼の周りを朱

く染めた。言葉には出さないが、顔にひろがる笑みが佐六の胸の内をあらわし、そんな佐六を見ているだけで、おなみも満たされた。家が建つことがうれしいわけではない。佐六が目を輝かせていることが、おなみの歓びなのだ。

——うちは果報者や……。

今までは縁遠かった果報が、これからは天から東になつて舞い降りてくるような気がする。

そんな思案をめぐらせて、おなみは笑みを口の端に浮かべていた。

その日も、佐六は自分の家を建てるために普請場へ向かった。おなみがいつものようにはたきをかけ、箒を動かして一息ついた昼九つの少し前、いきなり忠兵衛が板戸を開けて入ってきた。

「布団敷いてくれへんか」

言った忠兵衛の後ろを見ると、佐六が戸板の上でうつ伏せになっていた。後を担いでいるのは吾平だ。

佐六を布団に寝かせてから忠兵衛が説いたのは、こういうことだ。

梁を渡そうとしたとき、吾平が足を滑らせ、その拍子に



柱が倒れて佐六の背中に当たったというのだった。大工の仕事などわからないおなみに仔細はつかめないが、とにかく佐六が立ちあがれなくなっていることだけはたしかだ。それだけがおなみには大事なことだった。

おなみが佐六を覗きこむと、うっすらと笑顔を見せ、「いけるいける」と言う声も案外力強いから、どうやら大怪我ではないらしい。

それでおなみも安堵したのだが、医者の見立てを聞いたときに顔色が変わった。

忠兵衛が連れてきた年老いた医者は、

「長びくかもしれへんなあ」

まるで他人事で、

「どれくらいかかるんですか？」

おなみが案じ顔で尋ねても、

「ほれはわからん」

「ほんでもだいたいどのくらいか……」

それだけでも知りたいとせがんでも、

「ひと月で治るかもしれんし、二年かかるかもしれへん」

「ほんな……」

二年も寝たきりになったらどうなるのか。佐六は大工

を続けていけるのか、そもそも人並みに暮らしていけるのかと、憂いは積もるばかりだった。

十日後、見舞いにきた忠兵衛に探りを入れてみると、様子を見るしかないなあ」

としか言わない。

「もう大工はでけへんのですか？」

おなみが食いさがると、

「ほなけん、様子を見るしかない。仕事のこととは治ってからのことじゃ」

「ほんでも、手間賃は……」

口にはしたくなかったが、おなみには差し迫ったことだった。店賃は払わなくてはならないし、治療費もかかる。それに、ふたりが食べていく当座の金も要るのだ。

「わしも困つとるんじゃ。佐六がおらんようになって仕事もはかどらんし、注文も減ってきてよる。佐六にはようやってもろたけん、でけるだけのこととはしたいけんど、先立つもんがのうてはなあ」

「ほな、やめなあかん言うことですか？」

「ほんなこと……。治るまでのことじゃ。治ったらいつでももんできてくれてええ。ほんでも、いつまでかかるかわ

からんのに、わしもずっと手間賃を出すわけにはいかんのじゃ。おまはんもわかるだろ？」

佐六は腕がいい、次の棟梁は佐六にしようと思つていとまで持ちあげていた忠兵衛が、こうなると掌を返して他人扱いをするのだから、人はわからない。だが、それが世間というものなのだろう。人情などというものはあてにならないのだということを、おなみはそのとき思い知った。

ひと月が経ち、ふた月が経つても佐六は歩けなかった。

おなみの肩につかまってなんとか部屋の中を歩くことはできて、外へ出ることはできない。

急に恢復し、このまま治ってしまうのではないかと思つたこともあつたが、あくる日にはまたぶり返すというありさまで、おなみも途方に暮れた。

たしかに快方に向かっているというのならおなみも介抱のしがいがあるが、そうではない。悪くはならないかわりによくもならないという日々が続き、暗闇を手探りで歩いているようなものだった。

おとなしい佐六は怪我をしたときも足を滑らせた吾平

を叱らなかつたのに、このところおなみに当たり散らすようになつた。それもこれも身動きができず、毎日部屋に閉じ込められて苛立ちを覚えてゐるからなのだろう。

家を建てることを佐六に薦めたという負い目もあつたのだろう、忠兵衛はひと月分の手間賃を払つてくれたが、そのあとはたまに見舞いにくるだけで、手間賃の話などおくびにも出さなかつた。もう元通りにはならないと見切りをつけたのかもしれない。

こうなるとたちまち心配になるのが先立つもののことだ。佐六とおなみが食べる分にはさほど金はかからない

が、三日か五日に一度往診してもらおう医者への支払いが  
高く、貯めていた金もすぐに底をついた。

こうなるとおなみも働くしかない。朝早くから夕方ま  
で、近所の総菜屋で仕込みの手伝いをする事になった  
のだが、それでも医者への支払いは滞った。

医者に通ってもらおう回数を減らし、なるべく佐六に自  
力で動けるように励ましたのだが、そんな一言二言が佐  
六を追いつめたようだった。

言い過ぎたと悔やんだおなみは佐六に、

「気分直しにお酒でも……」



なけなしの金で酒を買ってきた。佐六は湯呑茶碗に一杯の酒を呑み、しかしおなみに礼の一言もなかった。

佐六はもともと呑める口だった。父親が大酒呑みで、呑んで喧嘩をしたときの怪我がもとで死んだから、ああはなるまいと肝に銘じ、決して酒には手を出さなかったのだ。

仕事仲間には誘われてたまに呑むこともあったが、父親の顔が浮かんでせいぜい二合くらいしか呑まなかった。おなみに薦められて呑んだのも、怪我をしてから初めてのことで、胃の腑にしみる酒は佐六の気分をほどくには

十分だった。

その日から、佐六は夕餉のときに一合ほど呑むようになった。呑めば憂さも晴れるのだらう。ふだんより口もなめらかになり、また大工に戻りたいなどと言い出した。そんな佐六を見たいがために、おなみは総菜屋からの帰りに酒屋で量り売りの酒を買って帰り、毎晩一合か二合の酒を吞ませてやることにした。

やがて佐六の心持ちも前向きになったようで、

「今日は歩いてみたい」

「ほれはええこっちゃ」

おなみは夕餉の前の小半刻、佐六に付き添った。

初めは足をひきずりながら長屋を行ったりきたりするだけだったが、それでも佐六は息苦しくなつて胸を押さえるほどだった。苦しくなると部屋に戻り、上がり框で休んでから、また外へ出る。そんなことをしている佐六とおなみに、長屋の住人が好奇の眼を向けたが、おなみは気にもせず、佐六の肘をとって押すように歩いた。

そうしているうちに少しずつ歩けるようになり、すると佐六の気持ちも軽くなったのだらう、それから長屋の外へも出るようになった。古物町あたりを歩きまわり、

時には新町川まで歩くこともあった。新町川の畔に立つと、風がふたりを撫でた。

この調子なら、

——前と同じように歩けるようになるかもしれないなあ。おなみの眉間にもほのかに明るいものが浮かんできた。「今日は早いし、足をのばして棟梁のどこまで行ってみよか」

そう言いだしたのはおなみだった。

棟梁の冷たさに愛想をつかしていたおなみだったが、前のように動けるようになったら、また棟梁のもとに戻

れるかもしれない。そのときのためにも挨拶くらいはしておいたほうがいいのではないかと、そこまで頭をめぐらせたのだった。

暮れなずむまでにはまだ間がある。古物町を出たふたりは、眉山のほうへ向かった。佐六を支えながら歩くのだから、もちろん歩みは遅く、いつものように道行く人の眼が刺さったが、おなみにはそんなことよりも棟梁がどう受け入れてくれるかと、そのことばかりが気になった。

棟梁はまだ帰っていないかった。いつもなら普請場から

帰っている頃なのだが、今日は遅くなると女将のおとしが言った。

小ぶりで屈託のないおとしは、職人たちにも気さくに話しかけ、出入りする者には分け隔てなく笑顔を振り向ける。無口で、とっつきが悪い佐六にも若いころから声をかけてきたし、佐六が怪我をしてからも気にはかけていたのだ。

おとしは佐六とおなみを部屋に入れて、

「まさか佐六がここまで歩けるようになるとはなあ」  
おとしが佐六の脚をためつつすがめつ見た。

「ここんとこ具合がええんですわ」

言ったのはおなみだった。佐六の口はふだんの通り閉じたままだ。

「もうあかんと聞いてとったけんどなあ」

おとしはあけすけにものを言う女だから、佐六の気持ちなどお構いなしだ。言ったのは佐六に向けてだったが、

「ひと月くらい前から歩けるようになったんですよ」

返事をしたのはおなみだった。

「ほれはよかったなあ。ほんで、今はなにしよんで？」  
なにをしているかって、これで働けるわけがない。

「まだほこまでは……」

「ほの脚では居職がええわなあ」

つまり大工はもう二度とできないだろうと言いつつ、  
いるようなものだった。佐六の恢復ぶりはめざましく、こ  
の分ではいずれ大工にも戻れるのではないかと自信を見  
せていたところだというのに、おとしは佐六を突き落と  
すようなことを言う。おなみはおとしに責めるような視  
線に向けたが、おとしはおなみなど見ていない。佐六の脚  
を魚の鮮度でも測るかのように見ながら、

「居職言うても色々あるけんなあ。 鋳掛屋とか箱物師と



か……。なにがええだろなあ。なんやったら口入れしてもええでよ」

おとしはもう佐六が大工をやめるものと決めこんでいるようだった。

「ほんでも、うちの人にはまた大工やりたいと思うとるんです」

おなみが言うと、おとしは眼をくるくる回してから、「また大工を？」

「ええ。こちらでお世話になれたらと思うとるんです」  
「ほんでも……」

おとしが落とし物を探すかのように顔を動かした。

「佐六は、竹次の下で働けるんかいな？　前は佐六が竹次を使とったんやしなあ」

おとしが言ったことが、おなみには通じないから、

「竹次はんがどないしたんです？」

じかに訊いてみると、

「知らんのかいな」

おとしもとまどっているようだった。

「ええ」

「ひと月くらい前に、竹次が次の棟梁になると決まった

んじよ」

「次の棟梁に？」

「うちの人ももう齢やしなあ。そろそろだれかに譲らなあかんと思とったんじよ。ほんまは佐六に譲るつもりだったんやけど、あの怪我でなあ……ほんでかわりに竹次に……」

おとしがこぼした飯粒を拾うように言った。

「ほれは知りまへんでした」

「ほなけん、もし佐六がここへくるということになったら、竹次の下で働くということになるんでよ」

「ほれは……」

「佐六はんはほれでええんかいな？」

おとしが詰め寄るように言ったが、佐六はうつむいたままだ。思いもかけないことを耳にして、佐六もどう答えればいいかわからないようである。

やがて佐六がおなみのほうに肩を寄せ、低い声でなにか呟いた。おなみが佐六の口許に耳を寄せると、

「もう帰ろ」

そう言っているのだとわかった。

そうするしかないとおなみも納得した。もう帰ると言

うと、おとしがそろそろうちの人も帰るはずじゃけん  
と引き留めた。が、おなみは佐六の背中を押すようにして去  
った。忠兵衛に会ったところで、なにを話せばいいとい  
うのか……。

その夜、佐六は呑んだ。おなみにも佐六の胸の内がわか  
ったから、好きなだけ呑ませてやることにした。五合の量  
り売りを、佐六は手酌で一氣に呑みほした。呑んで、その  
まま布団をかぶってしまった。

あくる日、総菜屋から帰ってくると、佐六はまだ寝てい

た。いつもなら歩きたいとせがむのだが、この日は起きあがろうともしなかった。

せつかく歩けるようになり、この分なら大工もできるようになると思っていたのに、棟梁はもう佐六を見棄てていたのだ。

それが佐六をどれだけ傷つけたかはおなみにもわかるから、無理に外へ連れ出そうとはせず、そのまま寝かせておいた。

夜になると佐六はまた呑みだした。それからは毎晩のように酒を呑んだ。それも一合二合ではない。五合六合を

呑み、やがては七合、八合を呑むようになった。

やがて外出もやめ、長屋の奥にある雪隠へ行く以外一歩も出なくなつた。

「ほんなにこもつとつたら躰に悪いんとちやうで？」

おそるおそるおなみが言うのと、あてつけるようにひとりを出ていった。もうおなみの助けがなくても足をひきずりながら歩くことはできたのだ。

おなみに金を無心し、杉屋町の縄暖簾へ行つた。古物町にも縄暖簾はあるが、人目を気にしてか、顔見知りの少ない杉屋町まで行つたのだ。あるだけの金で酒を呑み、金が

なくなればまた足をひきずって帰る、という暮らしを続けるようになった。

といつても佐六はこれまで縄暖簾に通つたことがないから、なじみの店があるわけではなく、むろんつけ払いで吞める店などない。手持ちの金がなくなれば帰るしかなかった。

無口で人と喋るのがなにより苦手な佐六だから、どこへ行ってもひとり隅で呑んでいる。隣の客に話しかけられることがあつても知らんふりを決め込んだから、たいていの客は顔をしかめ、中には「けったくそ悪いのう」な



どと言つて喧嘩を吹っかけてくる客もいる。だが、佐六はとりあわず、そんな客に背を向けて黙々と猪口を口に運ぶ。それを見てますます腹をたて、外へ引きずりだそうとする客もいたが、佐六は決して齒向かおうとはしなかつた。したところで脚を引きずつて喧嘩に勝てるわけがないとわかつていたし、それより酒を呑むほうがいと天秤にかけただけのことだった。

佐六はいつも隅の同じ席でゆっくりと舐めるように酒を呑んでいた。五合の酒を肴もなく一刻余りもかけて呑み、それで帰るのが常だった。

歸りはたいてい四つ過ぎで、歸るとたいてい水甕から柄杓で水を飲んだ。その音をおなみは布団をかぶって聞いている。眠りかかっていたときに、その音で目覚めることもあったが、おなみは文句も言わずに聞いていた。起きて話し相手になってもよかったが、佐六はなにも話さないし、それに明日も朝は早いから夜ふかしもできないのだ。

佐六は布団に倒れると、そのまま鼾をかいているが、おなみは一度目が覚めるとなかなか寝つけず、布団の中で悶々としていた。

——いつまでこんな日が続くんかいなあ……。  
それを思案すればますます眠れなくなつた。

そんな暮らしを続けているうちに、おなみも思いがあ  
まつて総菜屋の主常蔵に相談してみた。事情を説くと、親  
身になって動いてくれ、大工をやっていたのなら手先は  
器用だろう。知り合いに煙管師がいるから、その弟子にな  
つてみてはどうかと言つてくれた。

さつそく佐六に話してみると、佐六も負い目があつた  
のだろう、渋々ながらも東新町の裏店にある煙管師の家

へ通うことになった。

当初は小僧扱いされたらしく、佐六も不服そうではあったが、もともと胸の内をぶちまけるような男ではない。おなみにもなにも言わず、帰るなり酒を呑みに行った。それでも自分が稼いできた金で呑めるから、その分気分はいいらしく、前のように物音をたてて帰ることはなくなった。戸板を開け閉めするのも静かになり、水を飲むのは同じだが、おなみが目覚めないように気をつけているのが、わかった。

半年が経ち、一年が経つと佐六も仕事に慣れ、すると少

しずつ酒の量も減って縄暖簾へ行くこともなくなつた。その頃はもう家で二合か三合呑んでそのまま寝るようになった。それほど疲れていたのだろう。

どうやら佐六には煙管師の仕事が向いていたようで、おなみも口利きをしてくれた常蔵に頭をさげた。

つきあいが苦手な佐六のことだから、もし大工の棟梁になつていても弟子たちをうまく使いこなせたかどうかわからない。

それに注文をとつてくることができたかどうか。忠兵衛はそのうちできるようになるだろうと言っていたが、

内心では危惧していたに違いない。だから佐六が怪我を  
すると、まるで待っていたかのようには竹次に次の棟梁へ  
の道を作ってしまったのだ。もともと佐六にそこまでの  
望みをかけてはいなかったのかもしれない。

それでよかったとおなみは思う。煙管師は終日座った  
ままで、人とつき合うことなどめつたにない。注文がきて  
もこなくても煙管を作るだけで、注文をとりに行くこと  
などない。

そんな地味な仕事などできるかと嫌う男も多いが、佐  
六にはその仕事に向いていたようだった。

「どうなん、うまいこといつきよんで？」

おなみが訊くと、

「まあ……」

唸るように言った。

「合わんようだったら、また別の仕事探してもええんじよ」

「ほんなことない。わしには大工よりこっちのほうに向いとるかもしれんわ」

「ほうで。煙管師のほうが向いとるで」

おなみがうなずきながら言い、

「人と喋らんでええけんな」

佐六も苦笑しつつ言った。自分のことを貶めるわけではなく、遠くから見ることができるようになったのだろう。

「ほうやなあ、あんたは喋れへんけんなあ」

「わしにぴったりかもしれん」

「ほうかもしれんなあ」

おなみが二度うなずいた。

「ただ……」

「なんで？」

「この仕事は、大工みたいに稼げへん……」



「ほんなことどうでもええわ」

おなみが片手を大仰に振って言うのと、佐六が軽く咳をし、その咳に言葉をまぶした。

「ほんでも、この仕事しよったら、家は建てれんよ」

「家なんかどうでもええ」

「ほんまか？」

佐六が珍しくおなみを見つめた。おなみも佐六を見た。

佐六の双眸がかすかに濡れているように見えた。

「ほんなこと気にしよったんで？」

「もうちよつとで家が持てたところやったけんな」

大工町のはずれの家はあらかたできあがっていたのだ。

「家なんかいらんよ」

「ほうだったんか……」

「当たり前でえ」

そう言ってから、おなみはうつむき、肩のあたりで小さく泣いた。佐六も気づいたらしく、

「なんで泣くんな？」

怪訝そうに訊いた。

「もってきてくれたけん」

「だれがじゃ？」

「あんたに決まっとる」

おなみは泣くのをやめた。やめて笑いかけた。泣いたり笑ったり、おかしな女だなど思いながら、佐六が言った。

「わしは毎日もんてきとる。なんぼ酒呑んでも、もんてこんかったことはなかつただろ？」

「ほうやな」

おなみが笑った。ほんとうにそうだった。

「毎晩もんてきたなあ」

佐六がゆっくりと噛んでふくめるように言った。

「ほんでも……」

「ほんでもなんな？」

「ほんまにもんてきた」

「なんな、ほれは？」

下手な冗談を言った者を咎めるように、佐六が言った。

「いままでは形だけもんてきとった。ほんでも、これから  
はほんまにもんてくるんやなと思うて……」

「ようわからんなあ、もんてくるんに嘘もほんまもない  
だろ？」

佐六が笑った。おなみも笑った。

「ほうやなあ、嘘もほんまもないなあ」

「ほうじゃ。わしはいつでもここへもんできとる」

「お帰り……」

「ただいま」

そう言つて、ふたりは笑つた。これまで長屋の隅で息を殺すようにして暮らしてきたふたりが、初めて弾けるように笑つた。

夕餉を終えて寝つこうとしている長屋のどぶ板の上を、ふたりの笑い声が転がっていった。